

博物館展示論における生け花の授業

A Study of *Ikebana* in Museum Exhibition Theory

齋藤 美保子* 仲田 佐和子*

Mihoko SAITO

Sawako NAKADA

Students of the museum curator course in Koriyama Women's College excavate the stone implements in archeology lessons and exhibit them in museology training.

In the other side in museum exhibition theory lesson, they appreciate fine arts and crafts and learn to display them. Especially the study of *Ikebana* (Japanese flower arrangement) has an immediate effect to be aware of the Japanese aesthetics, and heighten the sense of balance that will be necessary to set the works, captions and explanation panels in the exhibition area.

はじめに

郡山女子大学短期大学部の学芸員課程の学生は、考古学の授業で石器の発掘をし、博物館実習でその展示を行う。

一方、博物館展示論では美術品や工芸品を鑑賞し、それらの展示について学ぶ。特に生け花の授業は日本の美学に気付くと共にバランス感覚を養うのに効果的である。その感覚は将来、展示空間に作品、キャプション、説明パネルを配置する時に必要なものである。

短期大学部文化学科が1981(昭和56)年に開設されて以来、博物館法第5条に定める学芸員資格の単位取得は、文化学科の教育の軸であった。歴史学の各分野を学び、更に「博物館学」「博物館実習」等を修めて、学芸員資格に必要な単位を取得して卒業した学生は、36期生が卒業した2018(平成30)年の3月の時点で1530名に上る。これは、文化学科で取得可能な他の資格、司書資格の単位取得者1232名、社会教育主事の単位取得者925名を大きく上回る数である。また、学芸員資格の単位取得を活かし、短大卒業後に文化施設の学芸員補として就職した卒業生、更に実務経験や専攻科での2年間を経て、正規の学芸員として活躍している卒業生も少なくない。

そうした文化学科の歴史の中で「博物館展示論」は、博物館法第5条に定める学芸員資格に必要な単位の改正に伴い、2013(平成25)年度文化学科に開設された比較的新しい科目である。二年次後期の15コマ2単位で、美術史を専門とし学芸員の資格を有する齋藤美保子が担当してきた。新たに求められている実践力のある学芸員養成のために苦心してきた6年間を振り返り、

* 文化学科

いささかの提言としたいと思う。

1. 「博物館展示論」という科目

博物館法第5条改正の目的は実践力のある学芸員を育成するためであり、「博物館展示論」の狙いは「展示の歴史、展示メディア、展示による教育活動、展示の諸形態等に関する理論及び方法に関する知識・技術を習得し、博物館の展示機能に関する基礎的能力を養う」ことにある。初期の参考書としては雄山閣出版の『博物館展示法』^{注1}等、公立の博物館を立ち上げる場合の道筋を行政的、技術的に概説した網羅的で大部のものが多かった。

しかし「博物館展示論」という科目は、展示内容によって広範な分野を含み、学芸員という資格が社会に浸透するにつれ、学芸員に求められる教養も広がっていった。そのため、全国の大学の授業もテキストも、次第に工夫を凝らし多様化の傾向を示していった。例えば2012(平成24)年発行の放送大学の『博物館展示論』^{注2}では、金工、陶磁、漆工、染色等の工芸品の扱いや地域の独特な博物館の紹介に多くの頁が割かれ、興味深い内容が盛り込まれている。「博物館展示論」が学芸員の必修科目であるばかりでなく、一般の人々が博物館を利用するときにも役立つ教養として捉えられるようになってきたともいえる。学生の参考文献に奨めている最近の出版(黒沢浩著『博物館展示論』講談社^{注3})では、展示解説のロゴやレイアウト等、デザイン関連の記述も多くなっている。

また各大学が附属の博物館を設置するようになり、博物館での実習と連動しながら展示を実践する例も見られるようになった^{注4}。つまり、従来のように博物館実習は各博物館にお任せして、大学教員は巡視するのみ、という消極的な取り組みでは済まなくなってきた。

2. 文化学科の学芸員課程

文化学科では1981年の開設以来、女子大には珍しい旧石器の発掘実習を猪苗代湖畔で継続してきた。またここ数年は「博物館実習」の授業として、その成果を社会に示す「発掘ガール展」を県内外で開催し、好評を得ている^{注5}。学芸員資格に必要な9科目で、扱う資料を分担することは、間口の広い質の高い学芸員を養成するうえで効果的である。本学の学生は発掘実習及びその成果展示で、考古資料に充分慣れることができるので、博物館展示論では特に美術品、工芸品を見る眼を養うよう努めてきた。

本学で毎年4回程度開かれている芸術鑑賞講座は、その内の1回が展示に関するものである。そのつど詳しい鑑賞指導をしてきたが、平成29年10月の「江戸琳派絵画作品展」(第199回芸術鑑賞講座)及び平成30年10月「竹久夢二展」(第203回芸術鑑賞講座)は、ガラス越しではなく、直に本画に向かい合える異例の露出展示であった。そのような得難い鑑賞経験から、作品をより良く見せる効果と作品の安全性の兼ね合い、コレクターの思いと受け手の心構え、と

いったことを学生に考えさせる良い機会であった。

実際に展示する現場では、展示品の特徴を十分に理解し、個々の扱いを熟知していなければならない。しかし最近の学生は電子機器の扱いが向上し、パワーポイントを駆使したプレゼンテーションが巧みではあるが、それに反比例するかのようになり、日本文化に対する基本的な理解や、伝統的な礼儀作法は身につけていない。博物館実習で学芸員から展示ケースの清掃を指示され、はじめてはたきの扱いを知る学生が大半である。学芸員資格の教育が、日本文化を水際で守っているのかもしれない、と学芸員仲間で笑うこともあったが、その傾向は年々強まっている。掛け軸の扱いを身につける以前に和室での所作を知らない学生、コンピューター・グラフィックスは上手でも折り紙や糊付けが苦手な学生が増えてきた。

そこで平成26年度からは、齋藤が長年収集してきた実物資料を使って、「風呂敷の使い方」「扇の竹台展示」「屏風の並べ方」「箱紐の結び方」「掛け軸の扱い」「巻物の扱い」「雛型による着物のたたみ方」等、短時間ではあるが演習を組み入れることにした。特に本館の茶室、慎思庵をお借りして実施する「和室の設えの理解」「茶道具の理解」「懐紙の使い方」「浴衣のたたみ方」などは毎年好評で、学生も積極的に取り組んでいる。平成28年度には宋徧流茶道の心得を持つ学生がいたので、簡単なお茶会を開き、薄茶手前の雰囲気を経験することもできた。また平成30年度は、学長先生からのご指示をいただき、62年館3階廊下に設置されている7ケースの、東北地方の民具の展示をリニューアルすることができた。

更に平成28年度からは、「博物館実習」と「博物館教育論」を担当し、小原流の生け花を嗜んでいる仲田講師が「生け花」を実演している。花は一輪でも美しいが、複数の花が姿良く生けられると、ひとときわ目を見張る。花々で調和の取れた空間はひとつの世界を構成し、そこに深い意味が感じられ感動がある。一輪の花を見せる工夫と、物に語らせる展示の苦心には、共通するものがあるようだ。

3. 生け花の授業

①生け花の歴史と「盛花」の誕生

生け花の授業は、まず生け花の始まりから生活の中に取り入れられていった歴史を解説する。生け花は「壺」や「花瓶」にいけられる花を縦型に「たてる」形式から始まっている。そのため、いけられる花に制限があり、加えて細かなきまりも多くあった。つまり、花を自由にいけて楽しむことはできなかったわけだが、明治時代になり、西洋の花が輸入されるようになったこと、また人々の暮らし方の変化により、生け花の実情が生活に合わなくなった。これにより、新しい生け花として提唱された形式が「盛花(もりばな)」である。「盛花」とは、平たい皿型の花器に花を「盛る」ようにいける形式であり、仲田が習得している小原流が近代生け花のさきがけである。

「盛花」は、それまでの丈の高い「壺」から横に広く平たい器に花器が変化しただけではなく、「主・副・客」という役枝の挿し位置を頂点とした不等辺三角形の挿し口を定めたことにより、それまでの「点」の挿し口から「面」への挿し口の変化を生み出した。挿し口が広がることによって、生け花は枝が空間に描く線としての眺めだけでなく、立体的な構成力が要求されるようになった。これにより花をある様式にあてはめるのではなく、花の個性を伸びやかに生かしたいけ方が求められるようになった。

もうひとつ生け花の形式の変化に大きな影響を与えたことは、飾る場所の変化である。すなわち、日本建築の床の間から、洋間、応接間、玄関へと草花を自由にいけることができる空間が多様化していったことにより、いける人の創造力が発揮できるようになったのである。

②生け花の特徴

次に『小原流様式集成』^{注6}を見せながら、生け花の特徴を解説する。まず、同じ花材であっても四季の表現は違う。たとえばカキツバタの場合、春は若々しい葉が芽吹き始める風情をつぼみが葉より長くならないようにいけ、最も旺盛な姿を見せる夏は、葉を春のいけ方より高くし、開花した花を葉より高くいけ伸び伸びと咲き誇る姿を表現する。そして秋には実を主体に、さらに晩秋は枯れかかった葉を風になびいたやや乱れた様子でいけ、名残りの花を低くいける。たとえば、春は格調高い楷書、夏は行書、秋は草書の趣である。

また、四季の表現のみならず、「秋」でも「初秋」「仲秋」「晩秋」と季節のうつろいも表現する。「盛花」で使用する花器は平たい「水盤」であるが、「水盤」は水が見えるという特徴がある。小原流では「日蔭(日蔭蔓)」というシダ植物で大地(土)を表現する。日蔭を「水盤」にどの程度敷き詰めるかにより、水の見せ方が変わる。すなわち、「初秋」から「晩秋」そして「初冬」へのうつろいを「水盤」に見える水の面積を小さくしていくことによって表現するのである。また、「水盤」の水に散り紅葉を浮かべる表現や、枯れ松葉が吹き溜まりになっている表現もある。まさに自然を花器の中に写し取る、生け花ならではの表現方法といえよう。近年は花というフラワーアレンジメントが主流になっているが、学生にはその手法とは異なる生け花ならではの表現方法を理解してほしいと願っている。

③生け花の実演

この講義の後、実演を行う。実演は小さめの花器を用い、花屋でセットで販売されている花材を使う。これは特別に準備せずとも身近に手に入る花材で十分いけられることを示すためである。

はじめに「盛花」を構成する役枝について説明する。「主・副・客」という役枝があることは前述したが、授業では最も初歩的ないけ方として「主枝」「客枝」の関係について解説する。



もっとも基本的な「たてるかたち」の「主枝」の長さは器の寸法の2倍以内、「客枝」の寸法は「主枝」の3分の1程度で45度前傾させる。「主枝」は花材の性状により、前後左右20度の範囲で傾斜させてもよい。「主枝」「客枝」以外はすべて「中間枝」といい、役枝の働きを助けたり強めたり、作品に変化をつけて個性を表現する。

まず「主枝」を決める。大事なことは、一輪の花や枝でも正面だけではなく角度によって表情が異なることである。花は必ずしも正面のみが美しいわけではなく、花と葉、茎の全体的な調和を観察して、様々な角度から最も美しい姿をいける。

次に「客枝」を「主枝」の3分の1程度の寸法とし、「主枝」に呼応するような形を意識しながらいける。初歩的ないけ方としてはこの二つの役枝が骨格であり、そのほかの花材を「中間枝」として自由に表現する。このとき、生け花の大きな特徴の一つとして、日本美術の特徴とも共通する「間」があることを強調する。複数の草花をいけるとき、「中間枝」は「主枝」



と「客枝」の骨格をどのように助けて強調し、より美しく見せるかという役割を担うが、その空間をまんべんなく埋めるのではなく、「間」を意識しながら立体的に見せる工夫をするのである。何を主に見せたいか、そしてその主のためにほかの草花とどうバランスをとりながら全体を統一していくか。それは展示の方法とも通じるところである。

このように、生け花には基本のかたちの骨組みとなる枝のきまりはあるが、それ以外は自由に個性を表現できる。このことも、展示は基本が大事であるが、それを助けたり強めたりすることは個人の創造力であることと共通している。

④学生感想

学生が生け花と接する機会は、高校の部活動(華道部など)くらいのもので、生け花をやったことがある学生はほとんどいない。いけ上がった作品を見る機会はあっても、いけている様

子を見ることは初めての学生も多い。想像していたよりも少ない花材で、しかもその花材に対して特別な技術を施すわけではなく、花ばさみで切って剣山に挿すということのみで仕上がる様子を、やや驚いているようなところもある。以下は学生の感想である。

- ・生け花の歴史や日本文化との捉え方、四季それぞれの表現のしかたがあることを学び、いけ方には一定の規則を守っていれば、あとは自由にいけることができることを始めて知りました。
- ・日本人は決まり事をきちんとつくって、その中から想像し、考える礼儀正しさを大切にしているのかもしれないと思いました。
- ・生け花は、季節や気候を表したり、すべてのものに意味を含ませ表現する奥深いものだと思います。
- ・花のひとつひとつをどう見せるか(魅せるか)、いける人によって違うところがおもしろいと思いました。
- ・日本は四季が暮らしの一部であり、自然の変化を楽しんできた日本人だからこそできる美の感じ方なのかと思いました。
- ・生け花は難しそうだという先入観にとらわれず、手頃な花材と身近な器で自分でもやってみたいと思いました。

⑤今後の展望

日本人の生活様式が変化し、生け花が飾られる場所が床の間から玄関や洋間へ変わってはきたが、生け花はやはり伝統的な日本文化のひとつである。そのことから、現在演習として取り入れている日本文化(風呂敷の使い方、浴衣のたたみ方など)、日本美術(掛軸、巻物の扱い)とトータルに関連付けながら、より理解を深められる工夫ができればと考えている。それは、学生が直接的に日本美術に関係する仕事に就くことにのみに関係するのではなく、社会に出て和室や伝統文化に触れる機会に、それにふさわしい所作や対応が自然にできることを願うからである。

終わりに

博物館展示と生け花はよく似ている。展示のテーマによって、展示品個々の正面をどちらに向けるか、隣に何を持ってくるか、観者の視線をどう誘導するか、背景をどうするか、ひとつの石器、一枚の絵をあるがままに美しく、意味ある物として見せるための努力は、まさに花を生ける心構えに通じる。また展示の際にもっとも重要な水平・垂直・奥行き感覚、余白や季節感を重視する日本美を養ううえで、生け花は極めて効果的である。博物館展示論を学んだ学

生全員が学芸員になるわけではないが、こうした展示論で身につけた知性と感性は、その後の人生においても役立つであろう。卒業生が生活の様々な場面で、花と語り合い、物を慈しみ、芸術を愛でる心を持ち続けて欲しいと願うのである。

文化学科は家政科福祉情報専攻、生活芸術科と融合して、平成30年4月に地域創成学科となった。それに伴い、学芸員の資格取得に関わる科目群は、地域創成学科の重要なユニットのひとつとなり、学生は歴史学ユニットだけでなく、情報処理士ユニットやデザインユニット等も同時に取得可能になった。これにより、デザインのセンスに優れた学芸員、情報処理に強い、現場で即戦力となる学芸員を育成していけることとなった。

生活芸術科は1955(昭和30)年の開設以来、挿花の授業を実施し、池坊華道職位の免許状(入門・初等・中等・高等・師範)を取得させてきた。60年余の間に蓄積された花器だけでも、相当な数に上る。今後は生活芸術科で挿花を学んだ卒業生の知識と残された花器も援用して、博物館展示論の中で、生け花の授業を充実させていきたいものである。

註

- 注1 加藤有次他編『新版・博物館学講座第9巻 博物館展示法』雄山閣出版 2000年
- 注2 佐々木利和他著『博物館展示論』放送大学教育振興会 2012年
- 注3 黒沢浩編著『博物館展示論』講談社 2014年
- 注4 「大学における博物館学教育」／『博物館研究51巻1号』2016年
- 注5 會田容弘・仲田佐和子・桑野聡著「学芸員養成課程の実質化と地域貢献の試み—郡山女子大学短期大学部文化学科を例として—」／『全博協 研究紀要 第19号』全国大学博物館学講座協議会 2016年 p.105-118.
- 注6 小原豊雲著『小原流様式集成』小原流編集室 1989年

